

## 第3回日韓共同学術会議に参加して

米原 謙 (大阪大学)

第3回日韓共同学術会議は「西洋政治思想に対する20世紀日本と韓国の対応」というテーマで、2004年7月19、20日の2日間、ソウルの梨花女子大学校LGコンヴェンションホールで開催された。韓国では前日に梅雨明け宣言が出されたとのことだったが、両日ともどんより曇った蒸し暑い日だった(もっとも同じ頃、東京では観測史上の最高気温を記録したとのことだったが)。こうした天候のせいか出席者の出足が悪く、第1日目は開始予定時間を30分ほど遅らせて、14時近くに始まった。まず韓国政治思想学会会長の張東震氏、続いて日本側を代表して加藤節氏(前代表理事)が簡単な挨拶をおこなった後、第1会議が始まった。以下、各セッションの報告内容を、わたしが理解しえたかぎりでごく簡単に紹介する。なお同時通訳を介していることや、わたしの知識の不足から不正確な面があるかもしれない。その場合はご寛恕をお願いしたい。

### 第1会議 自由主義(司会 崔相龍(高麗大))

報告: 洪性敏(東亜大)「自由主義の文化論的理解——後期フーコーの自由主義思想」

討論: 金鳳珍(北九州市立大)

洪性敏の報告は、現代韓国政治における資本と労働の激しい対立とノ・ムヒョン政権の危機というふたつの問題を視野に入れながら、自由主義が韓国政治にいかに関与し得るかを提起したものである。洪はここで後期フーコーが提示したGouvernementalité、politique de police、Bio-politiqueなどの概念が有効であると主張した。

報告: 本田逸夫(九州工業大)「丸山眞男の自由主義論」

討論: 金錫根(延世大)

本田逸夫の報告は、丸山眞男における自由主義を、丸山の恩師にあたる南原繁がおこなった自由主義批判との関わりで解釈したものだ。すな

わち南原との対話のなかで、南原が説いた超越的価値の重要性を認めることで、戦後の丸山の思想活動が始まったと主張した。具体的には歴史的相対主義への批判、主体の追求、普遍主義などは、いずれもこうした南原の政治哲学の根幹をなす理念との対話にもとづいているという。

### 第2会議 民主主義(司会 李鍾殷(国民大))

報告: 金東洙(統一部、統一教育院)「民主主義と民族主義の連係——民族共同体形成のための規範的接近」

討論: 加藤節(成蹊大)

金東洙の報告は、韓国と北朝鮮との国家統一を実践的な課題として設定したうえで、その基本枠組を民主主義と民族主義の関連のなかにもとめたものである。金は、平和的統一を軟着陸させるために、歴史的な民族的アイデンティティの確認と対話をつうじた差異の克服を唱えた。

報告: 寺島俊穂(関西大)「戦後日本の民主主義思想——市民政治理論の受容と展開」

討論: 徐裕卿(慶熙Cyber大)

寺島俊穂は、丸山眞男、久野収、松下圭一の三人にスポット・ライトをあてて、20世紀後半の日本における市民政治理論を紹介した。具体的には、丸山における「永久革命としての民主主義」、久野収における市民的抵抗と平和論、松下における大衆社会論と市民参加の理論などである。

### 第3会議 社会主義(司会 崔丁云(ソウル大))

報告: 崔致遠(高麗大、東亜細亜教育研究団)「Hic-Rhodus-hic-salutus——韓国と社会主義的近代性」

討論: 出原政雄(同志社大)

崔致遠は韓国と北朝鮮における社会主義の異なるありかたについて考察した。それは韓国における社会主義のまったき欠如(あるいは反共)、北

朝鮮における体制思想としての社会主義という対照である。崔は西欧における社会主義を「近代性」の表現とみて、韓国と北朝鮮における儒教と社会主義の結合（韓国では反共と、北朝鮮では主体思想と）のなかに近代性の欠如を指摘した。

報告：米原謙（大阪大）「日本型社会民主主義の思想——その展開と挫折」

討論：河宗根（東亜大）

米原謙は、日本社会党の左派理論の中心だった労農派マルクス主義者・山川均と、その後を継いだ向坂逸郎の思想について述べた。そして山川の理論が先進国の社会主義理論として適合性をもっていたのに、なぜ社会党が西欧型社会民主主義政党への転換に失敗したかについて報告した。

第4会議 民族主義（司会 梁承兌（梨花女子大））

報告：郭峻赫（高麗大、亜細亜問題研究所）  
「春園・李光洙と民族主義」

討論：李静和（成蹊大）

郭峻赫の報告は、李光洙の親日的民族主義がもつ含意を分析することで、韓国政治におけるきわめて現代的なテーマに迫ったものだった。郭は、李光洙が親日派に転向していく原因として、植民地支配という外的要因より、李の文化的民族主義に内在する要因を重視する。そしてニーチェをモメントとする「文明を通した支配」という理念が、李の転向の契機だったと結論した（なお郭峻赫の報告原稿は、加筆のうえ、『政治思想研究』第5号に掲載される予定である）。

報告：加藤節「カント・フィヒテ・南原繁——近代日本における民族主義論の一位相」

討論：朴義卿（監理教神学大学校）

加藤節は南原繁の政治哲学の展開とその民族主義論について論じた。それによれば、南原はまずカント、フィヒテと格闘することから、その共同体論を発展させ、自由な人格が各自の文化価値を生きることのできる政治共同体を理想とした。そしてこうした理想を根拠にして、ナチス・ドイツや天皇制下の「暗い憐れな愛国主義」を批判したと述べた。

第5会議 国際秩序観（司会 金榮作（国民大））

報告：金顕哲（高麗大、平和研究所）「20世紀初の朝鮮知識人の国際秩序観——日露戦争と第一次世界大戦期における戦争と平和に対する認識を中心に」

討論：金鳳珍

金顕哲は、20世紀初頭の韓国における新聞雑誌にあらわれた多様な国際秩序観を、現実主義と理想主義の交錯という視点から報告した。当時の韓国では、西欧的国際秩序への編入が不可避とみられていたが、国際関係の現実については、人種間の闘争、弱肉強食、民族主義の時代など見方があった。そして信頼できるのは力のみという観点が支配的になって、日本の統治に対する武力闘争に展開していったという。

報告：川田稔（名古屋大）「戦間期政党政治の国際秩序観——山縣有朋・原敬・浜口雄幸」

討論：金永寿（国民大、日本学研究所）

川田稔の報告は、両大戦間の三人の政治家の国際秩序観を、とくに中国政策との関わりで検討したものである。それによれば、山縣有朋に代表される伝統的な藩閥外交政策を転換したのは原敬で、原は中国に対する内政不干涉政策をとって対英米協調外交を推進した。さらに浜口内閣は、いわゆる幣原外交を展開して、非軍事的な市場拡大をめざす対中国政策をおこなったと論じた。

全体をつうじての感想を述べておこう。まず何より、日韓の報告者の問題意識のずれが大きかった。討論については、日韓のディスカッサントが、それぞれ相手側の報告に対して意見を述べる形をとったが、報告者も討論者ともに隔靴搔痒の思いがあったのではないだろうか。フロアからの質問も、日本側の報告には日本人からの質問、韓国側の報告には韓国人の質問が集中する傾向があった。その点で、日本側の討論者として金鳳珍、李静和の両氏が出席したのは、日韓の問題意識のずれを架橋する点で非常に有益だったと思う。

準備段階でのハプニングについても一言しておく。今回の大会のオーガナイザー（連絡係）は、

韓国側が朴鴻圭氏（高麗大学）、日本側がわたしだったが、開催を1か月後に控えた段階で、日程について両者の認識に1週間のずれがあることが判明した。このため韓国側では、急遽、日程を日本側の認識に合わせて1週間早めた。宿舎や会場なども変更することになり、たいへんご迷惑をおかけした。しかし韓国側の準備は万全で、日韓両国語による分厚い報告集も事前に用意されていた。韓国政治思想学会の関係者の本大会にかける情熱とご尽力に深い敬意と感謝の意を表明したい。